工芸室の窓から

No.8　2012.6.22

小海高等学校生活指導係発行

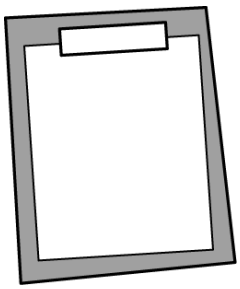
青板指導（あおばんしどう）から思うこと

本校では授業中に携帯が鳴ったり、他のこと（例えば読書など）を行っていたりして授業を軽視した行動等をすると、日々の学校生活を見直すために指導日誌を持って担当の先生にサインをもらう指導を行っています。その日誌を青いバインダーにはさんで持ち歩いているので「青板指導」と読んでいます。しっかり行えれば担当の先生のサインがもらえます。しっかり出来ない場合は担当の先生のサインがもらえず指導期間が延長となります。

今年度はこの「青板指導」の対象となる生徒が昨年度よりも多くなっています。そこで詳しく昨年度との比較を考えてみました。

昨年度４月から５月３１日まで
①青板指導対象生徒数（延べ人数）・・・・・・・・・・・・・・１４人
②そのうち２回以上指導になった生徒数（実数）・・・・・・・・１人
③予定の日数で終わらず指導が延びた生徒数（延べ人数）・・・２人

今年度４月から５月３１日まで
①青板指導対象生徒数（延べ人数）・・・・・・・・・・・・・・４２人
②そのうち２回以上指導になった生徒数（実数）・・・・・・・・６人
③予定の日数で終わらず指導が延びた生徒数（延べ人数）・・１６人



上記の通り、今年度はすべての項目にわたって昨年度を上回っています。これはよろしくない傾向です。もう一度学習にむかう態度を確認してほしいと思います。

・まずその日のスケジュールや時間割を朝の段階でしっかり確認する。
・授業に遅れずに行くだけではなく、早めに携帯をしまって教材の準備をした上でチャイムが鳴る前に自分の席に着く。
・体育や移動教室の場合は忘れ物がないか早めに確認して余裕を持って移動する。
・携帯の電源やガムを噛んでいないか、授業の前に必ず確認する。
・６時間目が終了しても携帯は出さないこと。ＳＨＲ終了後に操作すること。
※青板指導にならないようにひとりひとりが心掛けてほしいと思います。

登下校時の留意点

①歩く場合は歩道を利用し横に広がることのないようにして下さい。
②車を避ける場合は左右に避けずにどちらか一方に一列になるように避けて下さい。
③自転車はカギをかけて下さい。（最寄り駅まででも学校まででも）
④駐輪場は周りの迷惑にならないように利用しましょう。
⑤雨の日の登下校はいつも以上に注意して下さい。
⑥なるべく暗くならないうちに帰宅しましょう。暗くなる場合は複数で帰ったり、お家の方の迎えをお願いしたり、明るい道を利用するようにして下さい。

「遺伝医療とどう向き合うか」　　北里大学教授　高田史男氏

ある時１９歳のお嬢さんとそのお母さんが二人で遺伝外来に見えました。この方はその前年に２５歳のお兄さんを前年先天性の筋肉が衰えていく病気で亡くしていました。この病気は遺伝性の病気で、その妹さんにあたる女性は家系図上、※１保因者である可能性も否定できません。保因者であった場合、産まれるお子さんが同じ病気になる可能性があります。このような心配から保因者診断を行いましたが、その当時の診断は非常に難しく、保因者であるということを示すデータは得られなかったので、保因者であるとは言えないという結論でした。そこまでしか分かりませんでしたが、その女性は満足されて帰られて行きました。

数年後、その女性は赤ちゃんを産んで私の外来に来てくれました。その時は診察しただけで終わりでしたが、半年が経って一年が経って、だんだん歩く力や滑り台に登る力がちょっと弱いようにみられ、発症したかと思える状況になってきました。そこで診断を行いました。その結果、そのお子さんはやはり女性のお兄さんと同じ筋肉が衰えていく病気と診断されました。

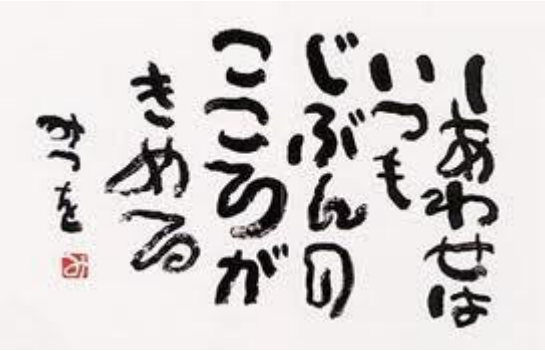
私は以前の検査の時に最先端の技術をもってしても保因者であるということを示すデータはないと説明したのですが、やはり心情的にはすまないなあという思いがこみ上げてきて、その女性に申し訳ないという言葉を発しました。するとその女性はこのようにおっしゃいました。

「私はずっと子供の頃から兄を見て、兄とともに育ってきました。そして兄は若い頃から音楽が好きで、自分の人生は音楽そのものだと言っていたぐらいに音楽が好きな兄でした。そんな兄を見ているのが好きでした。兄の病気がだんだん進んで、体が動かなくなって、そして手も足も動かなくなっていって、でも音楽を聴き続けて.....。そういう兄を見るのが好きでした。その兄が亡くなる少し前にこう言ったのです。『自分はたぶんもうすぐ死ぬだろう。普通の人よりもちょっと短い人生で終わると思う。だけれども自分にはお前という妹がいて、そして自分の人生を懸けられる音楽があった。だから僕は自分のことを不幸だとは思わない。幸せに死んでいける。』そう言って死んでいきました。私はそういう兄を見て育った女です。だからこの子の人生も私が引き受けることが出来るのです。」

この女性の発言を聞いて、この非常に重症な筋肉の病気があること自体が不幸なことである、という認識を私がそれまでずっと潜在的に持っていたのだということにはじめて気づかされました。それは殴られたような衝撃でした。医療の世界でも最重症の病気のひとつと呼ばれている疾患です。ところがその中ですら幸せを見つけることは出来るのです。そしてそれを感じるのは個人個人なのです。そしてそれを知った時「患者イコール不幸である」「病気イコール不幸である」という※２ステレオタイプを持っているということ自体が問題であると気づきました。価値観というものは多様なもので、病気があっても幸せを感じることは出来るし、逆に病気がなくても不幸を感じることだってあるわけです。医療者としてどうあるべきかというものをその女性から教わった、そういう気がしました。

今でもその患者さんとの付き合いはありますし、その女性も外来に来てくれます。私の医療従事者としての人生に大きく影響を与えてくれた方々であり、今も忘れずに記憶に残っています。

＜注釈＞

※１　保因者：劣性遺伝病の原因となる遺伝子を持っているが発症していない人

※２　ステレオタイプ：型にはまった画一的なイメージのこと